

「水谷 稔の生涯」展

結城哀草果に師事して

アララギ派歌人



水谷稔は広島文理科大学哲学
科在学中の昭和 20 年 8 月 6
日、広島市千田町の下宿先 2
階で被爆。戦後、復学し昭和
23 年 3 月卒業する。(33 才)



焦土と化した被爆後の大学(奥の建物)と
東千田町周辺。

(撮影：川本俊夫、写真提供：川本祥雄)

わが病癒えつつ通ふ條懸の
紫りさゆらぎ夏は来向かふ
すずかけ



昭和 8 年 4 月山形師範学校に入学。同
校の「曙短歌会」に入会、指導者の結
城哀草果を知る(18 才)。水谷は彼を生
涯歌の師と仰ぎ、アララギの歌ととも
に生きる。写真中央左が和装の結城哀
草果。二列目右端に水谷稔。聴禽書屋
は斎藤茂吉が昭和 21 年 1 月から 2 年
居住した処(山形県大石田町)。茂吉は
哀草果の師にあたる。

哀草果につながる縁ゆるされて
ちようきんしよおく
聴禽書屋に君と仰ぎし
えにし



大学卒業後、母校角館高校に国語教諭と
して着任。授業では古今の詩歌を生徒と
問答することがしばしばあった。
昭和 31 年から 7 年間野球部長として部
員の指導に当たる。水谷のもとには短歌
仲間のほかにも高校野球関係者がよく集
った。不意の来訪者に夕餉を振舞うこと
も多かった。教職にあった妻翠は子供か
らのサインで客の人数を知り、魚屋に走
った。

グラウンドの芝ふみ帰る夕日早く
今日城山にほととぎす啼く

あくまで人には優しく、家族を愛しみながら
自らには刻苦勉励をかした歌人の生涯

会 期：2010・7・24(土)～9・10(金)
午前9時から午後5時

休館日：毎月曜日

観覧料：大人300円 小人150円
仙北市民は無料です。

新潮社記念文学館

編 集：高貝次郎氏
協 力：水谷 翠氏

水谷 稔・年譜

1 9 1 5

大正4年9月1日 仙北郡長信田村斎内中田15番地（現大仙市）に生れる。父清治、母ノブの次男。

1 9 1 7

大正6年 仙北郡神代村東前郷字下道の母ノブの実家、佐藤方に移る。

1 9 2 7

昭和2年3月 仙北郡西明寺村（現仙北市西木町）の西明寺尋常高等小学校卒業。

1 9 3 3

昭和8年3月 秋田県立角館中学校卒業。同期に高田景次、富木友治、吉村良一、太田桃介などがいる。

昭和8年4月 山形師範学校に入学。同校の「曙短歌会」に入会、結城哀草果と出会う。

1 9 3 5

昭和10年3月31日 山形師範学校本科第二部卒業。山形県西田川郡京田尋常高等小学校（現鶴岡市）訓導となる。同年11月「横須賀海兵団現役兵」として三ヶ月の任務を終える。

1 9 3 6

昭和11年 秋田師範学校専攻科（1年）卒業。

1 9 3 7

昭和12年3月31日 雄勝郡明治村（現羽後町）明治尋常高等小学校訓導となる。



1 9 3 9

昭和14年4月1日 仙北郡四ツ屋村（現大仙市）四ツ屋尋常高等小学校訓導として着任。同僚と短歌会を開く。

1 9 4 0

昭和15年2月 結城哀草果選により「アララギ」誌上の【樹蔭歌選】欄に初めて短歌3首が掲載される。以後3年間に39首が哀草果選に入る。

1 9 4 2

昭和17年3月 角館町立角館国民学校訓導として着任。

1 9 4 3

昭和18年 秋田県立角館中学校国漢科教諭嘱託となる。

1 9 4 4

昭和19年3月31日 秋田県立角館中学校教諭の辞令交付を受ける。

1 9 4 5

昭和20年4月 広島文理科大学哲学科入学。広島市千田町2丁目に下宿す。同月29日仙北郡長野町下鶯野下村の佐々木源之助、サダの五女翠（大正13年3月20日生）と結婚。8月6日下宿先の2階で被爆。終戦後、鉄道が復活し叔父龍三と郷里に戻り、治療に専念する。安否を気遣い、妻翠は広島に赴いたがすれ違いになる。

1 9 4 6

昭和21年1月18日 長女浦子生まれる。2月広島文理科大学に復学。

1 9 4 7

昭和22年秋 角館町竹原町に新居を構える。

1 9 4 8

昭和23年1月27日 長男羊一誕生。3月6日大学卒業。秋田県立角館北高等学校教諭となる。11月30日北浦短歌会を結成、「北斗」を創刊。

1 9 4 9

昭和24年1月 結城哀草果が刊行した「山塊」に入会、精力的に作品の発表をはじめる。

1 9 5 0

昭和25年7月30日 開校にあわせて西明寺中学校校歌を作詞。「北斗」11号を終刊号として、北浦短歌会を発展的に解消。同時に角館短歌会の母体となる歌会グループを結成する。

1 9 5 5

昭和30年4月21日 次女草子誕生。

1 9 5 6

昭和31年 秋田県歌人懇話会幹事となる。

1 9 5 8

昭和33年 秋田県歌人懇話会短歌賞選考委員となる。12月秋田大学短歌会に講師として招かれ「短歌の本質」を講演。

1 9 6 0

昭和35年3月20日 「角館短歌会」の名前で浅利孝治、千葉幸吉、高橋恵一、東海林勇一らを中心に結成し定期的に歌会を開催する。

1 9 6 1

昭和36年1月16日 秋田県原爆被害者団体協議会の結成総会で初代会長に就任する。2月20日 「角館短歌」創刊。

1 9 6 3

昭和38年4月1日 秋田県立秋田南高等学校へ転勤。8月この頃から左三叉神経痛を病む。

1 9 6 4

昭和39年3月から4月10日 細網肉腫治療のため秋田県立中央病院放射線科に入院。4月から9月の間、NHK秋田放送局聴取者文芸短歌選者を務める。

1 9 6 5

10月24日 天理市に移り、天理中央病院に入院。

昭和40年1月 東京大学医学部医師高橋暁正氏（角館出身）の紹介で東京大学附属病院放射線科に転院、治療に専念する。5月26日午前4時50分、入院先で死去。享年50歳。出版を急いでいた水谷稔の歌集「山河」は間に合わず、死後刊行される。

序文に結城哀草果と「群山」主宰の扇畑忠雄の両氏が寄せている。

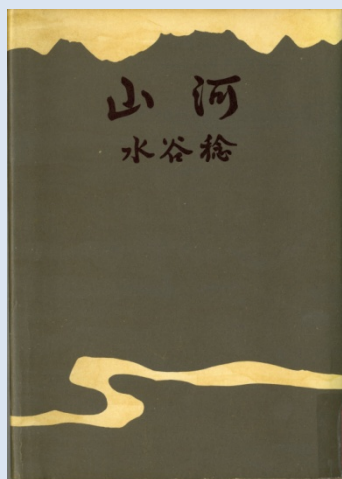


天理中央病院に入院中の稔を見舞う家族と（於・天理市）



水谷 稔歌集「山河」出版記念会

昭和40年9月12日（日曜日）午後1時から竜泉寺にて



結城哀草果
明治二六年—昭和四九年
山形県生れ。大正・昭和期の
歌人。大正三年「アララギ」
に入会、斎藤茂吉に師事。
歌集「山麓」ほか

扇畑忠雄
明治四四年—平成一七年
中国・旅順に生れる。広島で
育つ。昭和五年「アララギ」
に入会。昭和二十一年「東北ア
ララギ会」結成。『群山』創刊。

「従来短歌は排悶芸術であり、抒情的生活記録であつたと思われるが、水谷君の歌集『山河』の一、一七七首はその枠を越え、きびしき創作精神に立脚しての、自叙伝的作品群である。」
結城哀草果・序文より

「水谷氏の病気が重く、周囲でその歌集出版のことをいそいでいるという報を受けて、私は暗然たらざるをえなかつた。もしや原爆症ではないかという予感があつたからである。——略——。作歌することによつて、彼はひそかに自分自身と会話し、自分自身を慰藉していたのである。そこにはすでに遊びがなかつた。私たちがこの歌集に感銘するのは、作歌に彼の生命感が充足されているからである。」

扇畑忠雄・序文より

水谷 稔 著

歌集
山河

角館短歌叢書第二編
赤光叢書第二十五編

水谷 稔・代表歌

くま笹の青きおどろにかぶさりて山葡萄葉はいろづき光る

昭和一七年

夏山は夕べの雲のおりしづむひそけき時に湖岸に来つ

昭和一七年

胸もとに火傷やけどの両手ぬくもりて冷えしるき朝寝ざめかなしも

昭和二〇年

黄にひかる熱き焰にまたたくま焼かれたる十万の命いとほし

昭和二〇年

潰されし家下に敷かれ息づけり現身の吾生きてゐるかも

昭和二一年

被爆八年後の白血病は稀なりと言えど小さき記事にもおびゆる

昭和二八年

母を焼く煙たちのぼる山かげに栗の林の黄葉散りそむ

昭和二八年

張合ひなく曇る一日も窓遠き木原の上のくれなるの雲

昭和三六年

雪溶けしテラスに上履濡れてゆく午後の授業に疲れ覚えつ

昭和三八年

コバルト照射三〇〇〇終へ口乾き明りの白む窓に目覚めつ

昭和三九年

手押車に今日見上げゆく病庭の妻摘むはこべを濡らし雨降る

昭和四〇年